

新たに開花結実した温室植物

磯 部 実

本園で栽培管理している熱帯花木、熱帯果樹について1992年に新たに開花結実した植物を記録する。

1. ボンバックス エリプティクム

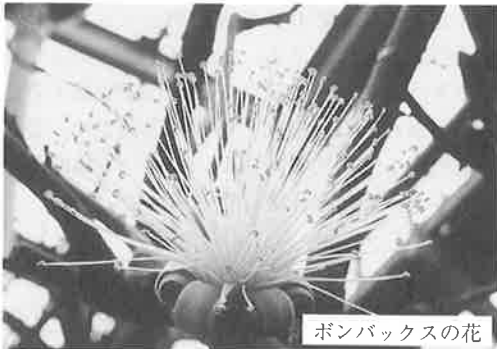
Bombax ellipticum (パンヤ科)

本種は、1978年にサボテン温室に1本植栽展示した。本個体は1985年より開花していたが、これまで結実は見られなかった。1992年の2～4月に開花し、初めて結実した。

開花時の樹高は約3m、基部より6本に分枝し、基部の幹回り周は約100cmであった。

花は約50個開花したうち、8個が結実した。

果実は長卵形で、長さ約10cmに肥大し、4月下旬から徐々にはじけ、長毛(綿状毛)に包まれた種子を周辺に飛散した。種子は、長さ約7mmの卵形茶褐色で、1果実中に約20個含まれていた。種子を播種したところ、発芽は良好であった。



2. オニカナボウ

Pachypodium rutenbergianum (キョウチクトウ科)

本種は、1978年にサボテン温室に1本植栽展示した。1992年6月に初開花した。

開花時の樹高は約2m、基部の幹回り周は約45cmであった。

花は、黄白色で直径7cm。散形花序に合計5個の花を茎頂につけた。開花期間は約2週間であった。結実はしなかった。



3. トックリラン

Nolina recurvata (リュウゼツラン科)

本種は、1978年にサボテン温室に2本植栽展示した。それぞれの個体は1992年の7～8月に初開花した。

1個体の開花時の樹高は約2m。主幹は2本に分枝し、基部肥大部の最大周囲は約150cm、もう1個体の開花時の樹高は約90cm、基部肥大部の最大周囲は約120cmであった。

樹高の高い個体は、6月下旬に茎頂より花茎を伸ばし始め、7月中旬に約100cmに達し、開花を始めた。樹高の低い個体は、7月上旬に花茎を伸ばし始め、7月下旬に約120cmに達し、開花を始めた。両個体とも開花期間は約2週間であった。結実はしなかった。

4. ススキノキ

Xanthorrhoea preissii (ユリ科)

本種は前報(栽培記録13号)で記したように、1990年10月に大阪国際花と緑の博覧会より2本寄贈を受けたもので、1個体は、1991年1月に開花した。もう一方の個体は、1992年の7月に開花した。

今回開花した個体は、1991年の春からサボテ

ン温室に鉢植え展示していたもので、開花時の樹高は約130cmであった。

本個体は、1992年6月上旬に花茎を垂直に伸ばし始め、約110cmに達した。7月中旬から開花を始め、開花期間は約3カ月であった。結実はしなかった。

また前報では、寄贈の約1年経過後も発根が見られないことを記したが、本個体は1992年の春に細根の発生が確認できた。



タバココナジラミの発生と防除について(2)

藤井俊昭・柴田昌男

平成3年の春に始まった大温室のコナジラミ類防除作業は、平成4年8月に一応の決着をみた。

平成3年度は、従来からのオンシツコナジラミに加え、タバココナジラミが併発し、種々の薬剤を散布したがあまり大きな効果はあがらなかった(前報参照)。そこで、平成4年度は3年度で比較的効果のあったロディー乳剤、スプラサイド乳剤に、タバココナジラミに対する薬

効が報告されているトレボン乳剤を加え、表のとおり病害虫防除作業を業者委託により実施することとした。

しかしながら、大きな薬効は得られず、毎月1回職員による臨時薬剤散布が8月まで必要となった。この間臨時に散布した薬品は、デス乳剤、アプロード水和剤である。

8月下旬にエビセクト水和剤とトレボン乳剤を混合散布したところ、1年以上にわたって絶滅できなかったコナジラミ類をほぼ根絶することが出来た。以降平成5年2月現在まで、委託薬剤散布を定期的に行っているだけで臨時のコナジラミ類防除作業は行っていない。

表. 平成4年度大温室薬剤散布行程表(委託分)

○印は実施時期(上・中・下旬)を示す

薬品	実 施											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
スプラサイド乳剤	○				○				○			
ダニカット乳剤												
トレボン乳剤		○				○				○		
ベンレート水和剤												
オルトラン水和剤				○							○	
トップジンM水和剤							○					
ロディー乳剤				○				○				○